

学位授与番号	医博乙第 1050 号
学位授与年月日	平成元年 6 月 7 日
氏名	竹 森 康 弘
学位論文題目	唾液中ラクトフェリン測定 of 臨床応用とその意義に関する研究 I. 各種疾患における耳下腺唾液中ラクトフェリン値の検討 II. シェーグレン症候群における耳下腺唾液中ラクトフェリン測定 of 臨床的意義
論文審査委員	主 査 服 部 信 副 査 竹 田 亮 祐 澤 武 紀 雄

内容の要旨および審査の結果の要旨

ラクトフェリン (LF) は各種外分泌液と多核白血球中に存在し、最近、慢性肺炎で尿液中 LF 濃度の上昇することが注目されている。一方、膵臓の姉妹臓器ともいわれている唾液腺の病的状態において、唾液中 LF の分泌動態についてはほとんど明かにされていない。本研究では、ヒト初乳より LF を精製し、LF のサンドイッチ酵素免疫測定法 (EIA) を開発した。これを用いて、ピロカルピン刺激により分画採取した耳下腺唾液中 LF 濃度を測定し、各種疾患で唾液中 LF 値がいかなる変動を示すかを検討し、その臨床的意義を明らかにしようとした。得られた成績は次の如くに要約される。

1. 開発した EIA 法は他の鉄親和性蛋白と交差反応のない特異性の高い測定法であった。
2. 唾液中 LF 濃度はシェーグレン症候群 (sjs) で平均 23.1→16.9→14.3→12.5→11.3 $\mu\text{g}/\text{ml}$ と推移し、対照群に比して全分画を通じて明らかに有意に高値であった。
3. LF 排出量、LF・総蛋白濃度比および LF・アミラーゼ活性比についても LF 濃度の場合と同様に、sjs において有意な上昇がみられた。
4. 対照群の平均値 + 2 × 標準偏差をカットオフ値とすると、sjs における LF 濃度の異常出現率は第 I 分画で 71%、第 III 分画で 88% にみられ、最高重炭酸塩濃度や液量の異常出現率に比して有意に高かった。
5. LF 濃度と最高重炭酸塩濃度、液量およびアミラーゼ排出量との間にはいずれにも有意な負の相関関係が認められた。
6. LF 濃度と耳下腺管造影所見との関連では、第 III 分画でみると、stage II 以上では 8 例全例に、stage I でも 4 例中 3 例に LF 濃度の上昇がみられた。
7. LF 濃度と口唇腺組織所見との対比でも、grade 2 以上で 9 例全例に LF 濃度の上昇がみられた。
8. sjs 疑診群においても、LF 濃度は有意な上昇がみられ、その陽性率は 40~60% であった。一方、治療群では未治療群に比して有意に低値であった。

以上の成績より、唾液中 LF は sjs において高頻度に上昇し、その測定は従来の診断法に比べて、勝るとも劣らない鋭敏な診断法であると考えられた。また、その病態を反映しうるとも推察された。

本研究は、LF の EIA 法を確立するとともに、sjs における唾液中 LF 測定 of 臨床的意義を明らかにしたものであり、sjs の診断に寄与する労作として評価された。